
ボランティア

柊鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボランティア

【Nコード】

N8288F

【作者名】

柊鏡

【あらすじ】

「セックスボランティアって知ってるか？」と、A氏が訊いたので、私は「知らん」と応えた。A氏は、ふうんと唸ってから、したり顔で説明し始めた。

「セックスボランティアって知ってるか？」と、A氏が訊いたので、私は「知らん」と応えた。

A氏は、ふうんと唸ってから、したり顔で説明し始めた。

「不具者だって性欲があるだろう。それを処理する権利があるってヤツ」

「それで？」

「不具者になろうと思う」

「は？ バカいっちゃいけないや」

私の嘲りにA氏はちつとも揺るがず、「障害者手帳だつて貰えるんだ。仕事せずともお金が入る。これで、風俗につき込む金もなくなるし、万々歳じゃないか」なんて、言いやがった。

私は、もう何と謂うか言葉を失して、「お好きに」と言った。

後日、本当にA氏は車椅子に乗って現れた。

「下半身不随になったよ」

どういう手段を用いたのかは訊かなかったし、訊きたくもなかった。

「バカだなあ」

「まあ、これから俺のサクセスストーリーが始まるんだ」と言い、高笑いしながら、帰って行った。とつくに、彼は仕事も辞めていた。そして、一週間位経った日、A氏から電話が来た。

「何だ？」A氏は泣きそうな声で言った。

「ババアだよババア、くっそたれ」

「はぁん。おまえさ、鏡見るよ」とだけ言って、私は電話を切った。A氏がそこまで、愚かだったとは露程も知らなんだ。

言っておくと、A氏はブサイクじゃあないんだ。

寧ろ、逆。まあ、そう謂うわけさ。本気で無償で働く人間なんて、いないのさ。同じ穴のムジナだよ、A氏もそのババアも。なんてな。

ボランティアは奉仕じゃないんだよってね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8288f/>

ボランティア

2011年1月16日07時06分発行